



249号

2019/12

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



学校の周りを朝の掃除：台中市の台中市立漢口国民中学校門の外周。授業が始まる前の7時30分に掃除をしている少年達。進学校なのだろうか、校門の掲示板に、成績優秀者の名前が貼り出されていた。それとも名前の掲示は台湾の風習なのだろうか？
(台湾台中市にて 2016年4月 佐々木健之撮影)

‘わんりい’ 2019年12月号の目次は20ページにあります

久し振りに、日本でもお馴染みの言葉が出て来ました。

・>・>・>・>・>・>・

春秋時代、呉と越の間に戦争が起きました。越の国は戦争に敗れて、越王勾踐は呉王夫差の馬丁となり、屈辱の限りを味わいました。暫くして、呉王夫差は、勾踐がすっかり呉王に心服したとみて、勾踐が越の国に帰ることを許しました。

帰国後、勾踐は必ずこの仇を打つと決心しました。この恥辱を忘れないために、勾踐は毎日薪の上で寝て、食事の前には苦い肝を舐めて、毎日毎晩、自分自身に言うのでした：

「お前は、国を滅ぼしかけたこの屈辱を忘れてはならない！」

勾踐は一所懸命努力して政治を行い、越の国を徐々に強大にしていきました。

越王勾踐は、このようにして長い間準備をして、最後に兵を挙げて呉の国を打ち破りました。



挿絵 満柏氏

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味：薪＝薪にする小枝、燃料にする柴や草；胆＝苦い胆嚢。自分を痛めつけるほどに努力を重ねて自分を鍛える。

使い方：中国サッカーチームは、臥薪嘗胆、刻苦訓練（我慢して辛い訓練を重ねる）して、初めて世界で通用するようになる。

・>・>・>・>・>・>・

このお話は日本でも良く知られていますが、このお話と違って、薪の上に寝るのは呉王夫差ですね。父王闔閭が越に敗れ、かたき討ちを誓った夫差が、薪の上に寝て越への敵愾心を掻き立てた；呉王夫差に敗れ、捕虜となって屈辱を味わった勾踐は、許されて帰国すると、この屈辱を忘れ

ないために食事の度に、苦い胆汁を舐めて努力を重ね、国力の増大を図り、呉王夫差を破り、呉の国を亡ぼした：というお話ですね。

この本は臥薪も嘗胆も両方を勾踐のこととしていますが、幼稚園児が対象ですから簡単に述べているのでしょうか。しかし、中国の書物に出て来る「臥薪嘗胆」は少し複雑です。

そもそも「嘗胆」は、《史記》の中の「勾踐世家」に今と同じお話が出て来ますが、「臥薪」はありません。言葉としては古くからあるようですが、特に呉越戦争に由来するとの記述はないようです。

「臥薪嘗胆」と一つにして使われた初めは11世紀の詩人蘇軾が「擬孫權答曹操書」（孫權になった積りで曹操の書状に答える）という文章の中だそうです。その後、「資治通鑑」などにもとられ、通俗的な「十八史略」を出典として、人口に膾炙するようになったようです。

このように四字成語一つ一つの背後にある、元になったお話、どの本に初めて載ったか

等々、細かいことを知ることが出来るのも、中国の人々が記録を残し、それが今に伝わっているお陰で、研究者のみならず、私達でもその経緯を知ることが出来るのです。有難いではありませんか。

それにしても、このお話の舞台となった、春秋・戦国時代は物語の宝庫です。特に長江沿岸の新興勢力であった呉と越に関わるお話はドラマチックで人々を魅了します。

因みに、劉邦の武将・韓信が、謀反の疑いを掛けられた時、「狡兔（ずるい兎）死して走狗（すばしこい犬）烹らる」と慨嘆しましたが、この言葉は、越王・勾踐の知恵袋、名宰相・范蠡が勾踐の下から姿を消す前に言った言葉なのだそうですね。

12月号と2020年の1月号は、遼陽出身の人物そして遼陽に深く関わった人物を紹介します。まず最初は女真族の「ヌルハチ」です。彼は遼陽出身ではありませんが、遼陽を語るときこの人無しでは語れないというくらいの人物です。前号の最後に書きましたようにヌルハチは漢字で書けば、(愛新覚羅努爾哈赤)です。つまり愛新覚羅家のヌルハチさんです。参考までに清朝のラストエンペラーの溥儀は、(愛新覚羅溥儀)です。ヌルハチは後金(後の清朝)の創始者で、瀋陽市内にある立派な「福陵」というお墓に眠っています。一番立派で広大な陵墓は2代目のホンタイジ(皇太極)の昭陵です。瀋陽市の北部に位置していることから「北陵」とも呼ばれますが、この呼び方が通りがよく今では「北陵公園」として整備され、瀋陽市の有名な観光地となっています。中国共産党はこの二人を「後金」の皇帝とし、三代目の「順治帝」から清朝の皇帝としています。1644年に明の最後の皇帝の「崇禎帝」が紫禁城のすぐ裏手にある景山の麓で縊死した後、順治帝が瀋陽から北京に遷都しました。それ以降が清朝ということですね。

後金というのは、前号でも書きましたが、女真族が1115年に「金」という国を建て1234年に元に滅ぼされますが、その約500年後にまた女真族が金という国を建てたので、区別するた

めに「後金」としたことを書きました。清は1911年に倒れるまで267年の長期政権でした。金と清を合わせると少数民族の女真族は386年も天下を取ったこととなります。2010年の中国の国勢調査では満州族は1038万人とされていますが、1千万人程度の民族が何億という漢民族を統治したのですから立派なものです。全国統一し



ヌルハチ (ウィキペディアから)

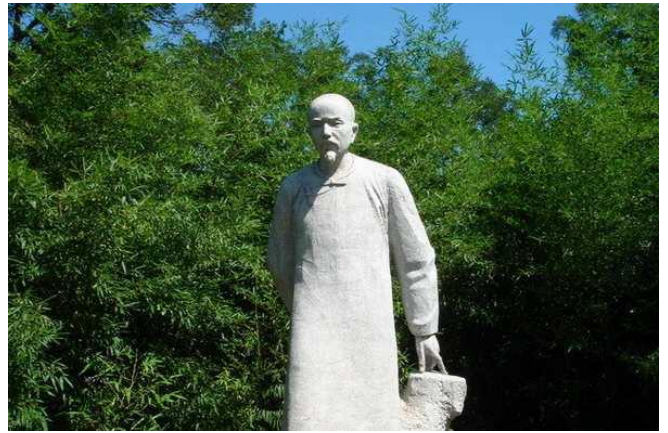
た秦(BC221年~BC206年)以降では、前漢と後漢合わせて409年となる漢朝に次ぐ長さと言えましょう。なお「女真族」は、17世紀に「満州族・または満族」と改称されました。これは満州語の民族名manju(マンジュ)の当て字なのです。

さてヌルハチの生誕地は、「ヘトゥアラ(満州語)」で現在の遼寧省・撫順市です。撫順市は石炭の露天掘りで有名だったところで、省都の瀋陽から東に45kmの所にありま

す。因みに人口は207万人(2015年)で車のナンバーは鞍山市に次ぐDです。ヌルハチが生まれた1559年頃は、女真族は大きく4グループに分かれ互いに抗争を続けていましたが、次第に頭角を現わした彼は苦難の末彼らをまとめあげ1616年に後金を興し生誕地のヘトゥアラを都としました。57歳の時です。そして1622年に遼陽に遷都するのです。遼陽は、金の時代は副都の位置づけでしたが史上初めて都になった瞬間です。ではなぜヘトゥアラから遼陽に遷都したの

でしょうか？ 大きく二つの理由がありそうです。その一つは、ネットでは「明、朝鮮、モンゴルに近く、太子河を利用して建築資材を調達しやすく食料自給がしやすい」旨が書かれています。撫順市と遼陽市はさほど遠くなく三つの国に行くのに地理的条件はあまり変わらないと思います。私はもう一つ、八つの城門を備えた堅固な城があったことが挙げられると思います。1621年にヌルハチが明が守っていた「遼陽城」を攻め落としたのですが難攻不落であったことからこの地に移ったように思います。この城に一度は入ったヌルハチですが、翌年には遼陽市の郊外に「東京城」を造りそこに住むのです。なぜかはよくわかりません。さらにその3年後には遼陽にとっては残念なことに瀋陽に再び都を移すのです。その地に東京城の建築資材を使い、立派な宮城を構築するのです。それが2004年に「瀋陽故宮」として世界遺産に登録され、これまた観光名所になっているのです。私にはヌルハチは計画性に少し欠ける様に思いますが、如何でしょうか？ 東京城にはやはり2008年に行ってみましたが、一部が復元されているだけで昔の面影はありませんでした。

中国の東北地方を中心に書いて来ましたが、ヌルハチが頭角を現した16世紀の後半は朝鮮半島や日本との関係はどのようなものであったのでしょうか。朝鮮半島は朝鮮王朝が支配し第14代王の「宣祖」の時代で、日本は安土桃山時代で豊臣秀吉の天下でした。その秀吉が朝鮮半島はもとより明も征服しようとの夢に陥り、朝鮮に出兵したのはご存知の通りです。1592年の文禄の役、そして1597年の慶長の役で朝鮮半島は大混乱となりました。宣祖は息子の「光海君」に国を預け北の方に逃げ出す有様でした。この時実は、



曹雪芹石像（百度百科から）

ヌルハチは朝鮮王朝に日本軍を攻めよう、と次のように申し出たようです。〈倭奴は既に朝鮮を侵奪している。やがて中国東北部まで侵そうとするであろう。よって精兵を選び厳冬に氷の合するを待って倭奴を征伐したい〉しかし、流石の朝鮮王朝も女真が来ればそれこそ国そのものが亡ぼされると判断したのでしょうか。その援兵を拒絶したそうです。

ヌルハチの最後を見てみましょう。1625年に瀋陽に遷都した翌年、いずれ明に攻め入るため、まず山海関を陥落させようと考えたのです。陥落するにはその手前にある寧遠城（今の遼寧省・葫蘆島市の中の県級市である興城市）を攻め立てましたがその時に負傷し、それがもとで亡くなります。享年67歳でした。戦いに明け暮れた生涯でした。後金が山海関を越えるのはそれから約20年後のことでした。

ヌルハチに紙面を取り過ぎた感がありますが、今号ではもう一人「曹雪芹」について紹介したいと思います。多くの方は「紅樓夢」という小説をご存知だと思います。「三国志演義」「西遊記」「水滸伝」と共に中国四大名著と言われます。日本でも映画に芝居にと親しまれていると思います。紅樓夢の作者が、曹雪芹ということも知られていますね。ところが曹雪芹には他の

歴史上の人物と違ってさほど詳しい資料がないみたいなのです。まず生没年からして曖昧です。生まれたのは南京ですが、生まれた年は1715年とも1724年とも言われているのです。没年も1763年と1764年の二説あるのです。たかだか300年前の人なのに、です。彼は、ヌルハチが創設した有名な「八旗軍」に属する漢族ながら旗人の家柄で、北宋の建国に功績があった名将・曹彬(931年～999年)の子孫と称したそうです。一族の間では魏の「曹操」(155年～220年)の末裔と伝承されているそうです。彼がなぜ南京の生まれかと言いますと、曹家は曾祖父以降3代にわたり南京にあった「江寧織造」という宮廷用織物を製造する会社を経営していました。清の第4代皇帝の康熙帝の信任が厚く、一家は南京で充実した生活を送っていたのです。実は曹雪芹の曾祖母が康熙帝の乳母ということもありました。ところが父の代で、第5代の雍正帝の帝位継承問題にからんで彼の一家は雍正でない側に付いたので家産を没収され曹家は没落。貧窮の中で一家は北京に移りました。その後雍正の13年間で終わり、乾隆帝になって曹家の生活は落ち着きを取り戻したのです。彼は友人の勧めもあり、紅樓夢の執筆に没頭し始めました。しかし運命は非情で1762年に愛する我が子を奪ってしまったのです。彼は悲嘆にくれるあまり自分も病の床に就き、とうとう1763年にこの世を去ったのです。(前述のように1764年という説もあります) 貧しい生活の中で20年間心血を注いで書いた紅樓夢はついに未完の小説となってしまいました。全120回のうち80回までが曹雪芹の作で、残りの40回は「高鶚(こうがく)」の作と言われています。

ではなぜ遼陽に関係の深い人かと言います

と、彼の祖籍(ルーツ)が遼陽市であるからです。おそらく遼陽に住んだことは無いと思いますが、遼陽市民は彼のことを誇りに思っているのです。そのためか市内に「曹雪芹紀念館」があり彼の功績を顕彰しています。私は友人と2008年に紀念館に行ってみました。中に入ると広い庭の中程に曹雪芹の座像が置かれていました。その奥に平屋建ての紀念館があり見学しましたが、一見の価値があると思えました。手元に「遼陽」と題する中国地図出版社が発行した分厚い書物がありますが、それには彼についてかなりの紙面を割いて紹介しています。紅樓夢と言え、「紅学」ですね。紅学は、紅樓夢に関するあらゆる学問をさします。前述したとおり、彼の人生ははっきりしていないことが多く、また未完の小説ということ、描かれた世界は人々の関心を引くことなどから学問の一ジャンルとして確立したと思えます。紅学の研究の柱は主として次の4点と言われています。

①曹学：曹雪芹の生涯、家系に関する歴史的
研究

②版本学：原稿に近い手写本に関する研究

③脂批学：紅樓夢の完成を支援した脂硯齋と
いう人物の研究

④深佚学：80回までの本文、及び「脂硯齋の
批注等から81回以降を探求する研究(脂硯
齋という人物については諸説あり)

という具合です。中国語の辞書にも「紅学」は載っています。なお紅樓夢の初版本は彼が死んで27(28)年後の1791年に発行されています。主人公である賈宝玉、美少女の林黛玉、良妻賢母型の薛宝釵を中心に展開する上流階級の生活を描いた紅樓夢は、あの毛沢東も愛読したそうです。(続く)

張志和の『漁歌子』と白居易の『憶江南』

報告：寺西俊英

今回ご紹介するのは、中唐の詩人・張志和の『漁歌子』と、中唐から晩唐にかけての詩人・白居易の『憶(憶)江南』の二首で、いずれも〈詞〉です。

まず張志和の〈詞〉から見て行きましょう。張志和は日本ではあまり馴染みのない詩人ですね。彼は732年に浙江省で生まれ、774年に42歳の若さで亡くなっています。彼の生れた時代は唐の全盛期であり、玄宗皇帝(在位712年～756年)の「開元の治」の時と重なります。また玄宗皇帝に仕えた阿倍仲麻呂をはじめ遣唐使が行き来していた時代でもありました。張志和が若くして科挙に合格したのはその頃でした。

しかし玄宗治世の前半期(開元年間)は良き時代でしたが、後半(天寶年間)は玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛するようになって次第に政治に身が入らなくなり、それと同時に世の中が乱れ始め、ついには755年、安祿山の乱が発生し、楊貴妃は殺され、玄宗は退位を余儀なくされます。

玄宗の退位後、肅宗のもとで彼は一度左遷の憂き目に遭いますが、まもなく許されて中央に復帰します。しかし理由ははっきりしませんが、最後には官吏の身分を捨て故郷に帰り隠遁生活

に入り、そのまま亡くなりました。隠遁先では、政治家で書家でもある顔真卿と親交を持ちました。「漁歌子」は彼が顔真卿と意気投した時の作品と言われています。顔真卿は剛直な性格であったようで、時の権力者の楊国忠(楊貴妃の従兄)に疎まれて地方官に左遷されたりしていま

すが、張志和もおそらく政治的妥協を潔しとしない硬骨漢であったのではと推察されます。ただし、彼の生涯については伝聞によるものが多く、生卒年をも含めて、必ずしも明確ではありません。顔真卿との交遊もあるいは後世の創作かも知れません。いずれにしろ資料は極端に少なく、残された著作も、この作を含めて「漁歌子」五首だけです。

ところで10月号では、〈詞〉とはどんなものか分かり易く解説されていますが、要するに〈詞〉とは楽曲の歌詞のことです。それぞれの楽曲名を総称して「詞牌」と言

います。そして作品の内容と詞牌の名称は必ずしも一致しません。たとえば「卜算子」(10月号参照)というのは、詞牌の名称であって作品の内容とは特に関係ないということでしたね。ところが「卜算子」の場合と異なり、今回の「漁歌子」は作品の内容も、漁をする人(張志和自身?)のことを詠んだもので、詞牌と一致して



張志和(百度百科から)

いるのです。〈詞〉とは唐の時代に発生し、宋の時代に完成されたジャンルと言われているのですが、植田先生から「〈詞〉はもともと〈曲詞子〉と呼ばれていて、妓女たちが民間のメロディーに合わせて歌っていたもので、日本でいえば端唄や都々逸のようなものですね。これを知識階級の詩人が作ったのは彼が初めてではないかと言われている。詞牌と内容が一致したオリジナルと言えるでしょうね」とお話し頂きました。

ちなみに「漁歌子」というこの作品は中国ではとても有名で、多くの人がこのスタイルに倣って作詞しているそうです。

yú gē zǐ
漁歌子
zhāng zhì hé
张志和

xī sài shān qián bái lù fēi
西塞山前白鹭飞
táo huā liú shuǐ guì yú féi
桃花流水鳜鱼肥
qīng ruò lì
青箬笠
lǜ suō yī
绿蓑衣
xié fēng xì yǔ bù xū guī
斜风细雨不须归

せいさいざんぜん
西塞山前白鹭飛び

とうかりゅうすいけいぎよこ
桃花流水鳜魚肥ゆ

じやくりゆう
青き箬笠

きい
緑の蓑衣

しゃふうさいう
斜風細雨帰るを須ず

この〈詞〉は、張志和が気ままな隠遁生活を送っている自分を、降りしきる雨の中、蓑笠つけて釣り糸を垂れる漁師の姿に重ねて詠んだものです。最後の三字「不須归（帰るを須ず）」は、ここでの生活は決して楽ではないけれど、汚れた役人生活よりは遙かにましで、過去の生

活には二度と戻りたくないという気持ちを込めたものだそうです。

作品の内容ですが、西塞山は浙江省の紹興にある山で、「前」とは麓のことです。そこにある川で釣りをしていたら桃の花びらが流れて来たり、水中に魚影が見え隠れします。鳜魚とは桂魚とも言って中国料理によく出る川魚だそうです。漁師は青いササで編んだ笠を被り、緑の蓑を着ています。風が吹き、雨が降っても帰らず魚釣りに勤しんでいるのです。

またこの作品には白鷺の「白」、桃花の「桃色」、箬笠の「青」、蓑衣の「緑」の字が配置され、色彩豊かなイメージです。生活の中の彩りを作者自ら楽しんでいるということでしょうか。

植田先生は、色について次のようなお話をされました。「『白』にも色々な白があります。真っ白は『雪白』と表現しますね。『桃花』はピンクがかった赤色ですね。『青』は、中国語では黒味がかった青と言う意味があり、例えば『鉄青』とは、ドス黒い青ということです。ご存知のように信号機、日本では以前、進めは青と言っていました但实际上は緑色をしていました。いまではLEDで青く見えますが、「青」と「緑」の区別は微妙ですね。それはさておき、ここは雨の中の風景ですから、極色彩でなく、墨絵のような淡々とした色合いを連想するとよいかと思います」と。

次に白居易の「憶江南」を見てみましょう。白居易は772年に河南省・鄭州市で生まれました。字は樂天で、こちらの方がお馴染みですね。号は「香山居士」。自らの詩文集「白氏文集」75巻を完成させたことで有名です。また前述の玄宗皇帝と楊貴妃の愛を詠った「長恨歌」は日本の平安文学に大きな影響を与えています。

yì jiāng nán
憶江南
bái jū yì
白居易

jiāng nán hào
江南好
fēng jǐng jiù céng ān
風景旧曾谙
rì chū jiāng huā hóng shèng huǒ
日出江花红胜火
chūn lái jiāng shuǐ nù rú lán
春来江水绿如蓝
néng bù yì jiāng nán
能不忆江南

江南は好し

風景旧よりかつて諳んず

日出づれば江花紅なること火に勝る

春来たれば江水緑なること藍の如し

能く江南を憶わざらん

この〈詞〉は、遊里の巷でよく歌われたそうで、「望江南」、「夢江南」「謝秋娘」等とも呼ばれます。白居易の「憶江南」は三首連作になっていますが、その中でこの一首が一番有名だそうです。白居易はもともと権力闘争を好まず、晩年には自ら地方官を希望し、各地に赴任しています。例えば杭州では西湖に堤防を築くなど役人として地方行政に尽力しました。このため人々はその堤防を「白堤」と呼び、蘇軾の「蘇



白居易肖像（ウィキペディアから）

堤」と共に今にその名を残しています。引退前に江南に赴任するわけですが、その当時の気持ちがよく詠い込まれている作品だそうです。植田先生も「私も西湖に行ったことがあります、とても素晴らしいところで、この〈詞〉を詠むと湖の周りをぶらぶらしたことが思い出されますね！」と懐かしそう。

作品の内容は、「江南は素晴らしい。風景は昔見たまま。日が昇れば、川のほとりの花々は火よりも赤く、春が来れば、水の色は緑に輝き、まるで藍染めの藍のよう。嗚呼！何で忘れられよう、江南！」と、実に見事な抒情詩ですね。

さてこの〈詞〉にも「緑」と「藍」の色彩が出て来ます。植田先生は「中国では、『青山緑水』と言いますが、日本では山は緑で水は青いと言って全く逆ですね。この辺りは科学的に分析しない方がいいですねえ（笑）」と言われ、皆さん納得顔。また「日本で『出藍の誉れ』、つまり教え子が師を越えると言う意味の諺がありますが、これは中国語では『青出于藍，而胜于藍』と言います」とも。ちなみに原典は『荀子』勸学篇の「青取之於藍，而青於藍（青は之を藍より取り、藍よりも青し）」です。いずれにしても「青」と「緑」と「藍」の区別は微妙で奥が深そうですね。

最後に付記しますと、日本では空海、橘逸勢と共に「三筆」と言われた第52代嵯峨天皇（786年～842年）が、今回取り上げた張志和の「漁歌子」に倣って〈詞〉を作り、今でもそれが残っているそうです。両者の生卒年から推定すると、ほぼ同時代に当ります。日本人もずいぶん早くから、つまり〈詞〉が中国でまだ一般的に普及する前から、すでにこのスタイルの作品を真似て作っていたのです。遣唐使を通じて、想像をはるかに超える幅広い文化交流があったことが窺えます。

海外出張の思い出（ナイジェリア編⑧）

高島敬明

今回は、ラゴス港の様子そしてラゴスの町の日本人会のお話しでした。

ラゴス港は比較的安全な場所でした。頭の上のカゴにボイルした牛のレバーを乗せて女の子が売りに来る平和な光景でした。作業員の中の何人かがフレンドになるんだ、と切り売りのレバーを買って食べています。美味しいらしいのですが、現地の、しかも十分ボイルしたのかどうかも分からないものを食べることは禁じられていました。注意するのですが友達になるんだと、背の高い女の子が来るたびにレバーを食べていました。彼は帰国後に風土病を発症してしまいました。こぶとり爺さんのような、硬くて直径が2cm高さ1cmほどのこぶが忽然と現れます。一週間もすれば消えてしまいますがまた違う場所にこぶができるといった具合です。医者からはもう一度アフリカに行って向こうの病院で直すしかないですね、と日本では対処できないとのことでした。調べたあげくアフリカの風土病研究機関がある群馬大学医学部に行けばいいことが分かり、彼は群馬に行って治療することになりました。後日談を聞きますと、何か月か掛かったようですが何とか直ったと聞きました。

日本船が入ると時々船の食事に招待されます。何人か呼ばれていますがい服を着て船内でのパーティに参加します。決まってテレビには最新のビデオが画面に映っています。それに釘付けになっていると食事とお酒が出て来ます。巻きずし、刺身、日本酒、日本のビールなどが出て来ます。懐かしい日本の味です。たまには船長も出席されますが、船の中では上下関係が厳しいと見えて船長への言葉は敬語が使われていました。たいていは航海長が対応されました。日本からアフリカ西海岸まで来るのですから当然パナマ運河を通って来ます。またイタリアに立ち寄って機器を積み込んだ時はスエズ運河を通って来たとか、海の男のロマンチックなお話を聞きながらの食事です。毎



ラゴスの市場（2005年）ウィキペディアから

日ラゴス港外の小エビを使った料理ばかりでしたから感激しました。

そんな中、またもや大きな事故が起きてしまいました。港での当社の作業員の中で非常に仕事のできる人で、専門はクレーンの運転手ですが何事も率先してやってくれるS班長の事故でした。船から荷物を下ろす仕事はその港の乙仲業者でなければ作業はできません。乙仲業者が仕切っていて、日本船のクレーンでも触ることはできません。すべて現地の作業員が担当しますが、これはどこの港でも一緒です。船からの荷物をトレーラーに積み込む作業中に事故は起こってしまいました。仲業者と日本人の作業の接点での事故でした。トレーラーの荷台の高さが1.2m、荷物の高さが3.1mであり、4.3mの高さの荷物の上に乗って荷物を吊って来たワイヤーの取り外し作業中の事故です。下ろした荷物の上で降りて来た船のクレーンのワイヤーにつかまり、身を乗り出しての作業中に合図もしないのに現地人のクレーン運転手はそのワイヤーを緩めたのです。班長はバランスを崩して、4.3mの高さから飛び降りる様に足から着地しました。「なんだ！ 船の運転手は合図もなくワイヤーを緩めてどうしようもないな」と、冗談のように話していましたが時間が経つにつれてかかどが痛い訴える様になりました。靴下を脱がせ足を見ましたが少し腫れているようです。どうしたものか判断を迷ってしまいました。今日は日曜日だけど病

院はやっているのかな？ 本人は何ともない、申し訳ないと顔をしかめて繰り返します。だんだんと痛みも強くなっているようなので、バスの運転手に病院に行くように言って関係者はバスに乗り込みました。道すがら私はまずいことになったのではと考えました。当社のように荷物や貨物を扱っている会社の職業病のようなもので、高所から飛び降りてかかとを痛める事故は国内でも多く起こっています。怖いのはかかとの先端の踵骨（シュウコツ）骨折で、皿のような部分の骨折です。皿の骨がくっついて直ったように見えても必ず少し段差ができ後遺症が出て来ます。歩くにはその患部を踏みながら歩くので痛くて完治はなかなかできないようです。祈るような気持ちでやっと着いた病院を見るといかにも古めかしい3階建ての建物でした。中は日曜日というのに足の踏み場もないような混雑で異様な匂いが鼻に付きます。英国の植民地だっただけにインド人の医者が多いと聞いていましたが、やはり年取ったインド人の医者でした。

治療の申し込みをするため通訳が用紙に必要事項を書いて窓口に行ったようです。すると彼は費用は先払いだと、飛んできました。「何！ そんなことを言ってもお金は無いよ」「保証金は150ナイラだそうです」岸壁の作業を中断してきたのでバスには10人そこそこはいたと思います。「財布のお金を全部出してくれないか！」と呼びかけました。150ナイラは日本円で45,000円くらいですから妥当な金額でしょう。お金は現場では使わないのが原則ですから誰もそんなに持っていないのです。私が50ナイラほど、なんだかんだで150ナイラをかき集めやっと入院し、レントゲン撮影が始まりました。付きっきりでしたがブリテンの英語で全く分かりません。通訳もやっと訳していました。レントゲン写真を示しながら心配した踵骨骨折は1か月の治療が必要だとの説明があり、今日は入院するようにとのことでした。3階のかなりいい部屋に入院です。すごく大きな浴槽が1個、ベッドが一つ、これだけしかありませんがその病院では一番広い部屋とのこと。他の病室や廊下を見ても非常な混雑です。しばらくして一人前のあまり美味しくもない夕食も終わり、本人もやっ

と落ち着きました。明日の作業のこともあり、「S班長私はキャンプに帰ります」と話しました。班長は50を過ぎた人でしたが突然に「係長帰らなくてくれ！ 一人にしないでくれ！」と泣き出さんばかりに哀願？ するのです。私も冷静に考えると、この状態の中で帰るのは無責任だ、と考え直しました。

運転手に明日迎えに来るように、と言って二人でこの病院に泊る決心をしました。とは言ってもベッドは一つしかなく、私はあまり綺麗ではない床に寝るしかないのです。その時までは床に寝ても私は睡眠をとることが出来ると思っていました。この病院では3種類の異なる制服を来た看護婦らしき女性がいるようです。白い制服にきれいな白い帽子を被っている女性、また白い制服は着ていますが帽子は被っていない女性、そしてピンクがかった制服を着た女性たちが大勢います。時間が経っても自宅に帰る人はいない様子で全員どこかで泊って行くのか、あちこちでたむろしていました。夜は更けてきましたが、まだ非常な混雑です。段ボールを見つけてきて寝付けないので床に座っていました。するとピンクの制服を着て、頭には編んだ髪が「ミミズ」に見えて仕方のない女性が二人「この部屋に泊っていいか？」と聞いて来ました。最初は何を言っているのか理解できませんでした。どうも女性としての商売をしているのか？ というとか、この病院の慣習で患者の部屋で空いているところに宿泊させるのか？ そのどちらかと思いましたが、しきりに「泊っていいか？」と聞いてくるのです。「班長どうしますか？」と笑いながら聞くと、「この痛いのには帰れ！」と一喝。それですべて終わってしまいました。非常な騒音の中、ドアを閉めてドアが開かないように工夫をして私がそこに眠りました。S班長は一晚中痛いかウンウンと痛みをこらえて唸っていました。私も一睡もできず朝を迎えました。私はこれはどんなことが有っても治療のために日本に帰国させねばだめだと心に決めていました。運転手のエマニュエルが病院に迎えに来て私と医者の方が話すこともなく病院を出てキャンプに帰りました。今回はここまでにします。 (続く)

中国山西省の旅 (前) ——各地のキリスト教会を訪ねて

為我井 輝忠

これまで山西省には1度訪ねているが、昨年(2018年)7月あたりから同省のキリスト教の教会を訪ねて調査してみたいと思うようになった。これまで北京、上海、大連、福州等の教会は訪れてきたが、山西省に関しては全く未知数で、どこにどんな教会があるかほとんど分からず、インターネットで調べてもあまり詳しい情報を得ることが出来なかった。

そこで“わんりい”の会員で、山西省に何度も行かれている岩田温子さんに相談すると、太原で日本語ガイドをしている黄玉雄さんに相談してみるといいかもしれない、連絡を取ってみましょうと、お骨折りを頂いた。黄さんにメールをお送りすると、すぐには返事がなく、2か月以上も連絡が取れなかった。最終的に連絡が取れたのは広州からで、もう長く広州にいるということであった。しかし、この調査旅行は引き受けましょうと約束してくれた。それからしばらくして山西省にある教会のリストを送って下さり、そこには50~60位の教会名が列記されていた。

私の方はいつ行くか検討したが、2018年度中には難しいので、翌年ということで今年の9月あたりにかけてが、季節的にはもう暑くなく時期が最適ではないかと考え、依頼した。黄さんの都合も伺い、8月下旬から9月初旬と決定した。後は航空券の手配をするだけでよかった。航空券はすぐ取れ、最初の2日分だけ太原のホテルを合わせて予約した。すべて万全の準備が出来た。後は現地で予約することとした。



ホテルの窓から見た太原の街は大都会だ

2019年8月22日、午後2時に羽田を立ち、上海の虹橋空港を経由し、太原武宿国際空港に夜10時頃に到着した。黄さんが迎えに来てはいるはずだったが、姿が見えない。しばらく待ったが不安になり、彼に電話をすると、明日だと思っていたが念のため私の自宅に電話をしたら、今日中国に出発したとの話に慌てて空港に向かっているとのことで、30分位してやっと会うことが出来た。

今回の旅行は、山西省の北部を回り、各地の教会を訪ねることであった。近年、中国ではキリスト教徒の急増やそれに対する中国当局の取り締まりが強化されているというニュースをしばしば目にし、多少不安もあった。また牧師の拘束や教会堂の破壊等が行われているとも耳にした。

中国は世界中でキリスト教が最も拡大している地域の一つであるが、現在、キリスト教信者の数は、天主教(カトリック)が5000万人、プロテスタントが3800万人ほどと推定される(ウィキペディアより)。中国には他国と異なり、プロテスタント教会は政府が公認している三自教



ガイドと運転手と共に（中央が筆者）

会と地下教会（非公認の家庭教会）とがある。この数字は前者のみで、後者は含まれていない。家庭集会の信者数は 5000 万人と推定されていて、両者を合わせると、8800 万人と推定される。またカトリック教会の信者数と合わせると、優に 1 億人を超えている。全人口の 1% に過ぎない日本のプロテスタント人口と比較すると、その大きな数字は正に驚異的である。

一方、カトリック教会（天主教）はヴァチカンとの直接の関係は持たず、中国天主教愛国会という名称でローマ法王の直接的な指導を受けず、独自の働きをしている。外交的にみると、ヴァチカンは中華民国と国交関係を持っているが、最近是中国側がヴァチカンに接近し、交流を図ろうとしている動きがある。カトリック教会にも政府非公認の地下教会があるようである。

プロテスタント教会は中国では基督教とか耶蘇教と呼ばれているが、政府はすべての教会を 1954 年に設立された「三自愛国運動委員会」及び 1980 年設立の「中国基督教協会」という政府公認の 2 つの組織で一元的に統括しようとしている。両組織に所属する教会のみが合法とされ、所属していない教会は非合法とされる。政府に登録している合法的な教会は「三自教会」と呼

ばれているが、実際そのような教派教会があるわけではない。三自教会には公認を得ることで会堂や土地、建物を合法的に取得できるという利点があるが、政府からの干渉や統制を受ける恐れがある。一方、政府に未登録の地下教会は政府による干渉、統制を忌避し、あえて登録することを拒んでいるため、土地や建物を取得することは出来ず、取り締まられる可能性が大きい。数年前に福建省福州市に住んでいた時、あるアメリカ人男性と知り合った。彼は地下教会と関わりがあり、よくそうした教会へ出かけているそうで、興味を覚え一度訪ねてみたいと思ったが、よく考えると、それはあまりにも危険なので、断念したことがあった。

2008 年の北京オリンピックに象徴される高度成長期の 2000 年代は、宗教に対して取り締まりが比較的緩やかであったが、2012 年習近平政権になると状況が一変した。増大しすぎたキリスト教の背後に、国家転覆を目論む欧米敵対勢力による宗教的浸透政策があるとみなして、キリスト教を国家安全に関わる問題として、厳しく取り締まるようになった。近年、各地で教会を破壊したり、牧師を連行したりというニュースを目にするようになった。

今回の訪問先は太原市、原平市、代県、朔州市、忻州（きんしゅう）市、大同市で、山西省の中央部から北部へ周遊しながら、各地の教会を訪ねた。全行程をガイドの黄さんと運転手の韓さんと共に車で回った。彼らはこうした旅行は初めてだそうで、各地で興味を覚えたのか盛んに写真を撮っていた。ところによってはいくつかの仏教寺院も訪ねた。次号で合わせて紹介したいと思う。（続く）

私がパイロットに漠然とあこがれたのは高校時代です。今でも飯田橋にハローワークがありますが以前は職業安定所と言っていました。ここで職業の適性検査をしていることを聞き、パイロットの適性があるかどうか確認しに行ったのです。

各種の検査用紙による適性のチェック、機材によるチェックを受けた後に、適性検査の担当者と面談がありました。適性検査対象職種には、医師、学校の先生、弁護士、建築士など沢山の業種があり、その中にパイロットもありました。何点満点か知りませんが、私は130点台で、パイロットになりたいと話すとそれなら150点位欲しいですねと言われました。

パイロットになるには宮崎空港にある国立航空大学に入るか、自衛隊、又は日本航空や全日空が直接募集しているパイロット自社養成に応じるしかありませんでした。航空大学の受験資格は、学部を問わず大学二年終了以上なので、私は1966年に受験し、1967年の10月に14回後期生として入学しました。航空大学が創設されて14年目の学生ということです。練習機の数に制限があり年30人の生徒を募集してこれを前期と後期と分けて入学させます。

入学後は午前には座学、午後は飛行訓練またはその逆のこともありました。前期生と後期生で同じ飛行機を使用するからです。一年目に自家用操縦士、航空級無線通信士、三等航空通信士、二年目には事業用操縦士、計器飛行証明の資格を取ります。

入学して実機訓練に入る前に飛行機の構造、エンジンのかけ方、計器類の見方や離着陸操作などの座学を受けます。練習機は前後に操縦席のある単発機で総重量は約2トン、エンジンは225馬力です。初回の離陸は、教官がするのを操縦桿に手



飛行中のT-34練習機



T-34A-JA3221 自衛隊から航空大学校へ移管

を添えて見ているだけでしたが、飛行機の加速はスポーツカーなみでした。簡単そうに見えた離陸も、2回目に自分で離陸してみると、飛行機はふらふらして少しも安定せず、飛行機の色は増えたり減ったりしていました。その後の訓練は空港の周辺に張り付いて離着陸のみ練習し、18時間余りの離着陸飛行訓練後、やっと単独飛行を許可されました。

初単独飛行の時は定期便も飛行場から遠く離れて待機してくれたようです。通常定期便は訓練機に優先して着陸しますが、この時は私が先に着陸しました。その夜は、先輩達が初単独飛行を祝ってくれました。

この学校は全寮制で、全校生60人が一棟の二階建てコンクリート製の宿舎で生活します。寮は一部屋4人に2段ベッドが二つ、机とロッカーが各人に一つでかなり狭いですが、当時はそんなもの

だと思っていました。

食事は日曜以外 3 食付いています。毎朝食は決まってヒジキとモヤシの味噌汁で、今でもひじきの味噌汁を見ると“うえっ”とします。

寮生活は全くの自由で門限もなく寮内でのお酒も OK でした。土曜には、時々安い焼酎などを買ってきて、寮で仲間と飲みました。宮崎は焼酎が有名です。

飛行機の話に戻ります。単発機ではちもんこうほう地文航法（有視界で地表を確認しながら目的地に行く）や、エンジンが止まったときに空き地を見つけて不時着をする訓練をしました。訓練過程の最後に地文航法訓練で、宮崎空港から大阪伊丹空港まで長距離航法を行います。

自分で飛ぶたいコースを好きに決めます。5 万分の 1 の地図をバインダーに挟み、膝の上に固定し、定規、デバイダーを持ち、航空用計算盤を首にさげ、航法用の記入用紙に通過地点の時刻とその時の上空の風を記録します。

私は九州の東海岸を北上し、その後瀬戸内海の島々を地図で位置を確認しながら、大阪に向かいました。飛びながら地点間の距離と時間を計り、偏流と飛行機の真速度から、計算盤で風を算出します。計算する時は、一時的に後席に座っている教官に操縦をお願いします。この長距離飛行を終えると単発機操縦に少し自信が付きました。

二年目に入ると、当時海上保安庁で多く使用していたビーチクラフト双発機に移行しました。計器飛行の訓練が主になりますが、最初は双発機の特徴をつかむために、離着陸と失速からの回復、急旋回などを練習しました。

ある天気の良い日に、宮崎県の南端に位置する都井岬の上空で、失速からの回復操作の審査を受けている時でした。同期生が、失速からの回復操作に失敗して、飛行機は突然キリモミ状態になってしまいました。きりもみ状態とは、文字通り機種を下にしてグルグル回転しながら落下していく



国産機 YS-11

状態です。この状態で最も怖いのは、コントロール（操縦桿）が少しも効かなくなることです。

原因は、右側のエンジンが何故か加速せず、左右のエンジンの推力に大きな差が出たからです。この状態でも、垂直尾翼にある方向舵だけはまだ効きます。自分がぐるぐると旋回して降下しているのに、都井岬が回っているように見えました。

幸い、教官の適切な操作により二回転してキリモミから回復しましたが、飛行機は 1000 メートル以上も高度を失いました。飛行機は速度制限値を大きく超えていたので審査は直ちに中止して帰投しました。

このときから、私は失速からの回復操作に対してとても慎重になりました。一年間の双発機の訓練過程で、北は北海道千歳空港、網走の女満別空港から、南は九州の奄美大島空港まで計器航法で飛びました。現在は、定期便が増えたので、羽田空港にプロペラ機は離着陸できませんが、以前は離着陸可能で、何度か訓練しました。

私達の前年のクラスから、当時の新鋭国産機 YS-11 型機の操縦資格も取得することになり、宮崎空港から仙台空港に移って、6 か月かけてその操縦資格を取得しました。総重量が 5.7 トン以上の大きな飛行機の操縦免許は、機種毎に航空局の審査を受けなければいけません。この点は、車の免許と異なります。全日空や国内航空に就職した仲間はライセンスがあるので入社後早い時期に YS-11 型機の副操縦士になりました。私は型式証明だけ取得しましたがとても有益な訓練経験でした。（続く）

私の7回の訪中記

和田 宏

私的な且つ古い話で恐縮です。

私は、第二次世界大戦が終わった翌年の1946年1月生まれであり、日本が戦前の軍国主義国家から民主主義国家へ、また英語を義務教育で勉強する時代に育ちました。アメリカは良い国なのだと信じました。しかし、高校生になって私の思想に変化を来しました。アメリカ軍の基地が日本各地にあり、ベトナム戦争をしているアメリカに日本が追従していることやアメリカが中国封じ込め政策をやっているのは変だなあと、ふっと考えるようになりました。私の父は、戦前北京に置かれた日本政府の出先機関に勤務し、姉は1941年北京の生まれです。父が北京勤務を終えて神戸港に戻って来たのは、真珠湾奇襲攻撃前日の1941年12月7日でした。北京に居た頃の父母は新婚ほやほやで、母は、阿姨（お手伝いさん）に家事を任せて、日本の銀座に当たる王府井へ溜達溜達（ぶらぶら）と買い物や散歩に出掛けるという極めて楽しい日々を送りました。父は京劇が好きで、梅蘭芳の京劇をよく見に行ったそうです。帰国に際して京劇のレコードをお土産に持ち帰るほどでした。

私が早稲田大学政治学科の学生になった1965

年、19歳の時から私は日中恢复邦交（日中国交正常化）運動に身を投じ、人民中国や北京週報などの拡販に情熱を燃やしました。何故なら、戦前に罪なき大勢の中国人らを戦争で殺したことを謝らず、隣国と国交さえ無いと言うのは不自然であり不幸であると思ったからです。プロレタリア文化大革命が起きて日中友好協会が分裂した時は毛沢東派に移り、日光の戦場ヶ原でキャンプをしながら毛沢東語録を暗唱しました。中ソ論争で、ソ連人の指導者ら1万人がサーッと引き揚げられてしまった中国は、手のひらを返したようにニクソンのアメリカとパッと手を繋いで、1972年2月アメリカと国交を回復させました。慌てて田中角栄が訪中して同年9月、日中国交回復（日本では日中国交正常化と言っています）が成りました。1973年5月、来日した日本語ペラペラの廖承志が佐世保湾を視察した際、私は一緒の船に乗りました。

〈初めての訪中〉

私が初めて中国を訪問したのが1975年5月。当時勤務していたNHK佐世保放送局の上司に休暇を申請して、『長崎県親善訪中団』の団員の一人として、北京と上海を訪問しました。19歳の時から日中国交回復、友好運動を続けてきた



散髪の銅像（1975年5月）



洋車に二人で乗っている（2010年10月）



弁論大会（2011年3月）

29歳の私は、念願が叶い胸がときめきました。江青・張春橋・姚文元・王洪文の“四人組”がまだ頑張っていて、文革の余熱の残る時期でした。両手に持った花を振りながら“热烈欢迎！（ルーリエホワンイン）欢迎、欢迎、欢迎！”と叫ぶ少女達の列の中を歩いて、工場や学校などを参観しました。訪問各所では、必ず毛沢東を讃える演説が行われました。上海の夕方、ホテルから黄浦江沿いの街路へ夕涼み出してみると、あっと言う間に大勢の中国人に取り囲まれました。庶民の生活ぶりや服装などを見た時、その貧しさに一種の郷愁や哀れを覚えました。北京では、紫禁城、万里の長城、明の定陵、天壇などを参観させてもらいました。

〈2回目の訪中〉

1998年夏、新潟放送局勤務の時、ローカルニュースのキャスターをしていた私は、新潟県と黒竜江省が友好県省の縁組を締結して5周年を記念し、県主導で結成された『友好の翼』という訪中団に随行する形で、哈尔滨市に一週間滞在し、番組制作者、カメラマンと3人で様々な話題を取材しました。黒竜江省政府を訪問した様子を伝え

る私のレポートは、北京テレビ台とNHK渋谷の放送センターを通じて日本に衛星中継で送信され、当日のNHK新潟放送局のローカルニュースで放送されたのです。帰国後は私の撮った中国庶民の生活ぶりなどのレポートを5回連続放送したほか、訪中団の団長を務めた副知事や哈尔滨市からの新潟大学の女性留学生にも出演してもらって、『你们来了哈尔滨』というローカル番組も放送しました。その時の嬉しい気持ちを中国語で書くと、「去了哈尔滨的时候，气候是非常热的7月末。白天的非常忙的工作结束后，在宾馆的餐馆吃饭，从凉台呆呆地望着哈尔滨的夜景，凉快的夜风柔和地打在我的脸，那时候的心情舒畅，不能忘记。」

〈3回目の訪中〉

発展著しい上海を見学するための個人旅行

で、2004年5月に主な名所旧跡を観光しました。上海は、1975年の最初の訪中以来29年ぶり、私は58歳。中国共産党第1回大会の行われた建物や、浦東地区に建設された東方明珠電視塔を見学。黄浦江の夜の遊覧船に乗船しました。戦前の上海は、魔都と称される程の魅力・魔力を持っていたと言われますが、夕風を頬に受けながら川島芳子も李香蘭も活躍した昔へ想いを馳せました。魯迅や郭沫若らと金子光春、横光利一、林芙美子、武者小路実篤



筆者（2011年10月）

など、日中知識人のサロンとなった内山完造が経営した内山書店跡も残されていました。

〈4回目の訪中〉

2010年10月、中日友好協会の招待による『日中友好協会創立60周年祝賀大会』に出席する為、「神奈川県日中友好協会」事務局長と2人で「人



18人の集合写真（2013年3月）

民大会堂」に入りました。直前に尖閣諸島海域で中国漁船による衝突事件が発生したので気を揉みましたが、思い切って参加した次第です。早朝から長蛇の列に並んで、毛沢東主席の遺体を見学することも出来ました。洋車（人力車）に乗って郭沫若の旧居や古い北京の町並みの保存地区を見て回りました。私は学生の頃から毛沢東の著作を読み漁り、“地下活動”をした“危険分子”（笑）だから、平均的な日本人と比べて“中国覇員”ですが、まだまだ中国の政治経済も前時代的な体制から脱し切れず、一般庶民の生活レベルも低いと感じました。北京駅周辺の舗装は、あちこち剥がれたまま。歩道橋の上では“發票！ 發票！（ファーピャオ、ファーピャオ）”と言いながら、偽の領収書を売るおばさんがたむろしています。王府井の目抜き通りでさえ、地面に土下座した若者が首を千切れんばかりに振って、お金を恵んでくれとジェスチャーをする乞食がおり、ムシロに母親と見られる老婆が死んだように寝ていました。でも誰もが知らんぷりして通り過ぎて行きます。

〈5回目の訪中〉

2011年3月、『神奈川県青少年訪問団』の団員として青島市と瀋陽市を訪問。参加者は、高校生3人を含む15人。私達の乗った飛行機が、丁度東シナ海の上空を飛んでいた2011年3月11日14時46分、日本では『東日本大震災』が起

きました。青島空港に着陸し、バスで市内に向かう途中に仲間達が携帯電話で大地震の発生を知り騒ぎ出しました。青島の総領事館に入って、その凄まじい惨状を中国のテレビニュースで見て初めて知ったのです。国際電話で妻子の無事を確認し、ホッと胸を撫でました。青島市ではドイツが始めたビール工場を見学。瀋陽市に赴き、東北育才外国語学校では授業参観し、高校生による日本語弁論大会の審査員を務め、高校生に演説のコツを一寸だけ伝授。訪問中は、連日連夜中華料理の大盤振る舞いの贅沢三昧。日本では大震災で大変なことになっているのに罰が当たらないかと心配するほどでした。

〈6回目の訪中〉

辛亥革命100周年に当たる2011年10月、5泊6日の日程で中国・広東省を訪問。広東省人民政府はじめ、孫文の故郷・中山市、肇慶市、東莞市の3市の人民政府の招待を受けて、それを記念する『神奈川県日中友好協会』代表団としての訪中でした。中国の南部沿岸都市は、経済発展が極めて目まぐるしく圧倒されました。町には6車線の大きな道路が走り、両脇と中央分離帯は、亜熱帯地方らしく手入れの行き届いた緑と花がどこまでも生い茂っていました。主な各都市は新幹線で結ばれ、高速道路が縦横無尽に走り、大きなビルや高層マンションが林立。また工業団地、先進的IT産業などの展覧場、大学、合弁の自動車工場、辛亥革命博物館、放送局などのその立派さ、豪快さには度肝を抜かれました。中国の目覚ましい発展ぶりに驚嘆です！とうとう日本は追い抜かれた、という実感でした。我々の訪問は地元のテレビでローカルニュースとして取り上げられました。連日連夜、中国料理のフルコースで大歓待を受け、とても食べきれず、飲み切れず。乾杯ー！ 乾杯ー！ の連続です。何かやれと皆から催促され、止むを得ずピエロ役に徹した65歳の私が中国語で歌を歌い、踊りました。中国人らも一緒に手を取り

合って大いに盛り上がり……。辛亥革命の歴史や毛沢東のスローガンを知っていて、それを中国語で叫ぶのは私しかいませんから。哈哈大笑ー！！

中山市の通りには、“辛亥革命 100 周年”というスローガンがあちこちに貼ってあったものの、我々を接待してくれた関係者達から、それに関連した話題や意義、孫文の“三民主義”とその後の中国共産党による指導・変革との繋がりがりや位置付けについての発言が聞かれなかったのは、物足りませんでした。中国人達が、経済至上主義に偏り過ぎているように私には見えませんでした。孫文の提唱した“三民主義”を簡単に言えば、「民族主義」は当時の中国が列強に浸食されていたので、それからの中華民族の独立と統一を意味し、「民権主義」は清朝を倒して封建的な専制政治体制に終止符を打ち、自由と平和の共和制民主主義政治を実現することであり、「民生主義」は、博愛に満ちた庶民生活の質の向上を意味します。これは、フランス革命の時のスローガンである自由・平等・博愛に通じるものです。つまり自由は、中国の独立である「民族主義」に当たり、平等は「民権主義」を意味し、博愛が「民生主義」に当たります。

そこで私は、隣に居た大学教授の中国人に、こっそりと『民族主義は、毛沢東が実現した。民生主義は鄧小平が改革開放政策によって国民の生活水準をあげて実現した。しかし民権主義は、新中国では普通選挙も行われず、共産党の事実上の独裁で未だ実現していない。孫文が死に際に言ったように“革命未だならず”だと思いがあなたはどう見るのか？』と聞いたら、『最後の民権主義は、なお 10 年、20 年かかるか、もっとかかるか判らない。』と答えたので、この教授は少しは判っているんだなあと思いました。

〈7 回目の訪中〉

2013 年 3 月、瀋陽市と盤錦市を神奈川県日中友好協会の代表団として訪問。瀋陽市の全ての

川は氷結していました。デパートは綺麗で何でも揃っていました。価格は高く、外国人客と見ると決して値段は下げてくれませんでした。マンションやビルの建設ラッシュでしたが、ちゃんと売れるのだろうか？と心配になりました。高校の英語の授業は、先生・生徒は全て英語を使っていました。私達が 5 日間宿泊した瀋陽市のホテルは、李香蘭も泊った旧大和ホテルでした。

中国は建国後、一度も無記名普通選挙をやったことがないし、一党独裁。言論の自由なし。都市と地方の格差。幹部の腐敗・賄賂。一人っ子政策による高齢化の到来など、山のような課題を抱えています。一方では GDP 世界 2 位になりましたが、自尊心の強い中国政府は、こうした課題を知りながらも簡単には解決できずに悩んでいます。56 の民族、バラバラの 14 億人をまとめて行くためには少々、強権的な政治を行わなければならないようです。家庭にも、職場にも、社会にも、国家にも、世界にも課題・矛盾・不十分さは存在しますし、人生も“順風満帆”には行きません。うまく行かないからこそ、うまく行くようにしようと言う仕事や役割、使命が生まれるのかもしれないですね。それが人間にとっても、国家のリーダーにとっても、生き甲斐に繋がるのでしょうか。

ところで、日本国内でも私がお勧めの場所があります。古本屋街の神保町には、魯迅ゆかりの内山書店があり、日本に留学した当時 20 歳の周恩来が、よく訪れたと言う中華料理店『漢陽楼』も直ぐ傍らで営業しています。周恩来が好んで食べたと言う“小龍包”を食べられますよ。また日比谷公園内にある中華料理店『松本楼』には孫文の妻・宋慶齡が弾いたピアノが展示されています。你一定能惊动中国人朋友！

恒例の2019 夢広場盛大に!! 第22回 町田発国際ボランティア祭

まちの駅・ぽっぽ町田イベント広場 2019年11月3日(祝)

今年も国際ボランティア祭が、ぽっぽ町田で盛大に開かれました。前日は天候を心配していましたが、やはり「晴れの特異日」だけあって曇りがちでしたが雨は大丈夫でした。今回の夢広場は、特別企画が二つありました。一つは、来年2020年が東京オリンピック・パラリンピックが開かれることから、例年「ボイストレーニング」で会場を盛り上げている Emme さんに「一緒にオリ・パラ応援歌を歌おう」コーナーを設け盛り上げていただく事になりました。もう一つは、町田市が南アフリカ共和国の東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとなったことから、アフリカ日本協議会代表理事の津山直子さんから、「虹の国アフリカ・ネルソンマンデラ」と題してのお話を企画しました。どちらの企画も好評を博し、来年のオリンピック・パラリンピックに繋がるものと思います。

夢広場は午前10時に稲野実行委員長の開会挨拶で始まりました。雨天の心配がありステージでの出し物は15時で終了となりましたが、そのステージでは歌やケーナやオカリナの演奏そして国際色豊かなダンスが次々と繰り広げられました。ハワイアンあり、フィリピンダンスあり、タヒチアンダンスあり・・・またイベント広場では下記の団体による出店があり、珍しい物品が所狭しと販売されていました。会場にはそれらに合わせて踊ったり歌う人もいて笑顔が溢れるばかりの時間が過ぎて行きました。途中、石坂丈一町田市長の登場があり、このイベントに花を添えていただきました。

わんりいのブースは、今年もラオスの山の民・モン族への支援でモン族の女性たちが丹精込めて刺繍した美しい大小のポーチ、ペンケー



ス、健康保険証入れ、しおりなどを販売したほか、今回初めてとなる絵本作家の佐藤紀子さんデザインの各種トートバッグも合わせて販売し、刺繍の造形美や宮沢賢治をイメージしたバックに多くの方が足を止められ、売り上げに繋がっていました。16時に全てが無事盛会裏に終了しましたが、主催者の発表では昨年の400人の1.5倍の600人もの来場者があったそうです。



〈ブース出店団体〉

■わんりい ■レインボーチルドレン
■シリアンハンド ■(社)アムネステイ
インターナショナル日本町田グループ
■環境修復保全機構 ■東京科学少年
応援計画 ■Machida Philipino Friends
■ネパール・ミカの会 ■東京都行政書士
会町田支部 ■東京都社労士会・多摩支部
町田地区 ■国際ソロプチミスト町田—さつき
■町田国際交流センター(以上)

◆‘わんりい’の催し◆

2020年‘わんりい’の新年会

2020年2月2日、‘わんりい’恒例の、“シユワ
ンヤンロウ”（羊肉のしゃぶしゃぶ鍋）を囲む新
年会を開催致します。年に一度の楽しい一時を、
是非ご一緒したいと思います。（詳細下記）

記

- 日時： 2020年2月2日（日）11:00～15:00
- 場所： 麻生市民館 料理室
小田急線新百合ヶ丘駅下車 徒歩3分
- 会費： 1,500円
- 定員： 40名
- 申込： ☎ 090-1425-0472

E-mail : t_taizan@yahoo.co.jp

（わんりい会員・会友のみご参加頂けます）

2020年の春節は1月25日です。2月2日は、
春節後初めての日曜日で、‘わんりい’の新年会
にはうってつけの日になりました。

この新年会は、毎年楽しみにして下さる方が
多くて、時には、せっかくお申し込み頂いても、
お断りしなくてはならないこともあります。参加
を希望される方はお早めにお申し込みください。



【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の
会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの
原稿で作られています。海外旅行などで体験され
た楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見
聞きた面白い話、これはと思う楽しいイベント情報
などを気軽にお寄せ下さい。

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1500円入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい
途中入会の方には会費の割引があります。

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みか
ら付けられました。「文化は万里につながる」
の想いから名付けました。主としてアジア各国
から来日の方々と協力して文化交流活動を続
け、国や民族を超えた友好を深めて来ていま
す。会員になりますと、

- ①年10回、会報誌‘わんりい’を送付
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

- ◆インターネット会員の制度もあります。メ
ールアドレスを頂いた方に、毎月、美しい
カラー版‘わんりい’をお送りします。
- ◆町田国際交流センター（町田市民フォーラ
ム 4F）、町田生涯学習センター（109ビル
6F）、中国文化センター、川崎市国際交流
センター、神奈川県立地球市民かながわプ
ラザ・他でご自由に取って頂けます。上記
へお問い合わせください。

▼12月の定例会

12月9日（月）13：30～

三輪センター第三会議室

▼1月号おたより発送日

12月28日（土）10：30～三輪センター

第二・第三会議室（弁当持参）

‘わんりい’249号の主な目次

寺子屋・四字成語(28)卧薪尝胆……………	2
「遼陽」という街(4)……………	3
「漢詩の会」(35)張志和の『漁歌子』と白居易の『憶江南』…	6
海外出張の思い出（ナイジェリア編⑧）……………	9
中国山西省の旅(前)各地のキリスト教会を訪ねて…	11
退職ジャンボ機長の回想②……………	13
私の7回の訪中記……………	15
恒例の2019夢広場盛大に!!……………	19
新年会のご案内・他……………	20